



横綱昇進 (中)

口上はシンプルに

と「実力は互角だ」という声に勇気づけられた。

柏戸は昭和36(1961)年9月27日、横綱昇進の使者を迎えた際「横綱として恥ずかしくない成績を挙げたため頑張ります」と口上を述べた。当時23歳を目前にしていた。同時昇進で2歳年下の大鵬は「喜んでお受けします。これからも頑張ります」とまとめた。大鵬が2場所連続優勝して文句なしの綱昇進したのと抱き合わせであることと柏戸は自覚していた。一方で同時昇進を祝う世間の反応にも新鮮な思いで接した。「成績はともあれ、(大鵬

撲やってみる」と父だけを山形に帰し、自分は東京に残ることにした。母・かつるは自分を安定した職業の公務員にさせようとしていたので両親が夫婦ゲンカを繰り返したことも聞いた。それらも自らの出世で丸く収まった。「晴れ晴れとし

た気持ちがかみ上げては、さあ次も頑張らなければ」との思いを強くした。横綱土俵入りは雲龍型になった。一門の総帥・時津風親方(元横綱双葉山)と同じもので、先輩横綱・鏡里に学ぶことになった。せり上がりの時に右手だけを

た日馬富士は優勝9回。

綱打ちに感激新た

太刀持ちは同門・井筒部屋のもろぎし名人鶴ヶ嶺に依頼した。後に逆鉾・寺尾と長兄・鶴嶺山の「井筒3兄弟」の父であり、師匠になった人だ。露払いの時津風部屋の子に頼んだ。

使者を迎え入れて後、翌月2日に明治神宮(都内渋谷区)で行われる横綱推挙式に備えて今度は麻もみ、綱打ちが行われた。

白い綱を形作るため、麻

糸をならし、撚っていくもので、これを銅線に巻いていく。3組作って、白いサランの木綿布で覆い、三つ編みのようにして綱が出来上がる。

付け人は7人以上

付け人は綱締めを考える

と7人は必要だ。前と後ろに1人ずつ。左右に2人ずつで、横綱の腰に合うように締めていく。さらに太刀を管理する者が1人。力士総数15人前後の小屋屋だけに伊勢ノ海部屋だけではまかなえず、力士数が60人以上だった時津風部屋の若い衆を借りることになった。

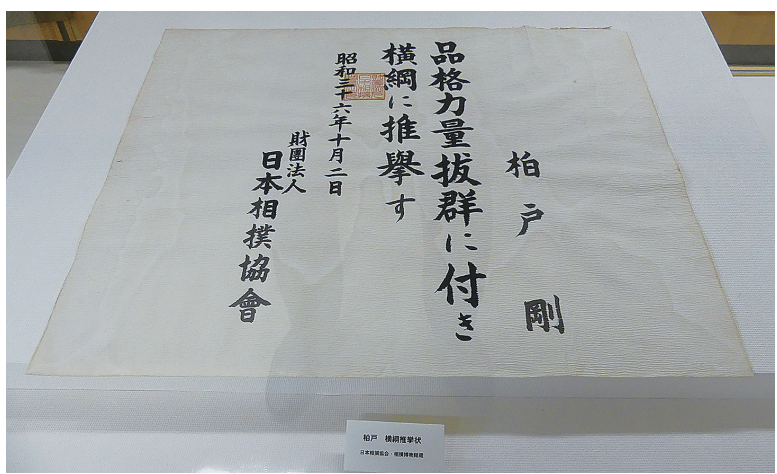
そうした光景を見ながら「本当に横綱になったんだな」の実感が湧いてくるのだった。大関時代「オレは別に横綱にならなかつた方がいいです」と師匠に答えたことがあった。ある面本音だったが、親の心子知らずと、親方が悔し涙を流したことを知らされ、困惑したこともあった。

難解四字熟語の口上

○：横綱・大関昇進時の口上における一時のトレン

「意専心」、横綱時は「堅忍不拔」。ただ出だしを「けんしん」と言い間違えるハプニングがあった。貴ノ浪は大関昇進時「勇往邁進」。同門の佐渡ヶ嶽部屋の大関昇進では琴光喜が「力戦奮闘」。琴奨菊は「目標に向かって努力を続ける」という意味の「万里一空」。最新の正代は「至誠一貫」を用いた。

次回は2月2日付に掲載



土俵入りは雲龍型

手加減してくれたいせよ兄弟子たちとの稽古で分が良かったことで「オレ、相

敬称略 (富樫 嘉美)